

愛知芸大の誕生

奥村 昭雄

1964年10月1日。東京芸術大学建築科のスタッフ全員（吉村順三・天野太郎・山本学治・茂木計一郎・温品鳳治・奥村昭雄）は、この日、始めて運転される新幹線に乗車して、名古屋まで行き、新設される愛知県立芸術大学の敷地調査に向かった。名古屋までの新幹線自体が初めての運転であり、建築学科のスタッフたちは、全員が興奮気味であった。しかし、敷地は広大で、特段の特徴は見当たらず、私の背丈程しかない瘠せた松が疎らに生えているだけであった。何処から何処までが敷地なのかも解らない状態で、全員初回の現地調査は、全く何の役にも立たなかった。せめて、土地のキャラクターぐらいは掴みたい。緩やかに見えている勾配を正確に掴みたい。広大な全体のコンタの測定を、県にお願いし、敷地全体の性格を隅々まで捉えることが可能になった。これは、愛知用水の建設予定地であり、そちらの側からミリ単位の精度が求められていたので、結果的には愛知芸大だけの必要性から行われた訳ではなかった。

愛知芸大はまだどんな科を作って、どんな先生を呼んだらよいかというようなことが決まっていなかった。愛知県からたのまれて教職員の構成を考えることを、東京芸大の教授会がお手伝いして、科と先生の構成が決まった。建物については建築科の教授会がたのまれた。私はたまたま卒業制作で東京芸大の改築案をやったので教職員の構成について研究していたし、卒業してから学校に残って実際の改築の手伝いをし、音楽学部の練習室・レッスン室・演奏室、美術学部の金工科の設計と現場を担当した。それから10年経って、今度は愛知芸大の設計に参加した。再び美術学部と音楽学部の沢山の先生の意見を伺った。そうして出来たのが現在の愛知県立芸術大学である。吉村先生は、ほかの先生たちと一緒に構想を練り、敷地模型を作って配置を考えた。土地が持っている一番長い線が、ほぼ南北に一致していたので、これを軸にしようよ、と言われ、まだ学校自体が変化発展してゆく可能性があるから、南に余裕を残した。自然の池の配置とも、よく馴染む。現在は、法隆寺展示館が結界のような位置にあるのが一寸気になる。軸線を横切って地下を通過する水系も大切だと考えた。全体には、自然の起伏に沿って低く抑えようとした。

桑原知事が芸大を作ろうとしていたのに議会があまり賛成でなかったのだが、空中に浮いて居るように見える全長117mの講義室棟が完成したら、議員さん達はこれはいい、と言って賛成に変わってくれた。それでも予算は厳しかったので、設計には苦労した。1960年代に、主なところは完成した。1980年代には学生数の増加と、講義内容の充実による増築をした。植栽については、はじめの小さな松が植えられていた砂と赤土の状態から、いまのような緑豊かな景色になるまでには何年くらいかかったであろうか。ずっと昔は今と同じだったかも知れないが常滑から瀬戸にかけて長い間、陶磁のための伐採が続いたために荒れていたのだろう。動植物も棲みついてくれるようになったのは嬉しい。

上野は、緑も多く、隣は動物園で自然な環境だったけれど、私のいた頃の建物は教室に電気もなく、冷暖房はもちろん無く、でも楽しい学校だった。1950年代～60年代に建て替えたが、その後は建て替えをしないで改修に改修を重ねて改修済み。

愛知芸大の現在は、植樹も成長し、豊かになって、池と水路にも恵まれている。